

基礎研究力強化に関する意見

小谷元子

11月29日の会議に出席することができないため事前配布資料2に基づき書面にて意見を申し上げます。

ようやく基礎研究力の強化について議論ができるようになったことうれしく思います。世界的にも高く評価される独創性や強みを持つ日本の基礎科学が、5期にわたる科学技術基本計画に基づき戦略的に進めてきたにも関わらず、なぜ国際的なプレゼンスを徐々に失いつつあるのか、真剣に議論し手当しななければならない時期にきています。

資料2はこれまで様々な機会に議論されてきたことをよく分析されまとめていただいております。一点より大きく取り上げるべきこととして、「国際」について以下に意見を述べます。

○国際

・研究力の低下で注目される指標は主に国際的なプレゼンスにかかわるものです(引用、国際共著、ランキングなど)

・一方で日本の科学技術に関する国際戦略・予算配置はあいかわらず、日本が世界に追いつくことを目指したときから逸脱できずにいます。

・EUでは、「人類の課題はグローバル化」ということを単なる標語に終わらせず、課題解決をグローバルな体制で取り組む枠組みを真剣に考えています。政策決定の段階から世界を巻き込んだ議論・情報発信、それに基づいた国際共同研究の重点化や、取り組みにヨーロッパ外から参画させる仕組み、頭脳循環など、濃淡のついた施策があります。第6期の議論においては是非検討いただきたい。

・世界をリードする研究者が数多くいながら、なぜ世界中からそこに優秀な頭脳が集結する拠点が形成されないのか。ファンディング、省庁および大学の国際化、研究者のリクルート(スタートアップ、生活支援、ペンションや退職金の移行なども含む)、留学生獲得、国際情報発信など総合的に検討するワーキングが必要。

○最後に 3対応策の「基礎研究力の定義(トップ被引用論文数?、特許の引用論文数?、大学ランキング?)と、どの水準を目指すのかを明確化」については、やや違和感があります。

基礎研究力の定義は独創性、創造性、波及性などによるものであり、ここに挙げられたことはむしろ「基礎研究力を測定する指標」というべきものです。研究者が目指すものは上記のような質の高い基礎研究であり、それを指標により観測し育成向上するように努力するのは組織であり、ファンディングであると考えており、この両者を混在することは本末を転倒し弊害を招きかねない。誤ったメッセージにならないよう留意すべきと考えます。また、基礎研究には種まき、選別、収穫、波及と異なるフェーズがあり、それぞれに評価軸も必要なファンディングの在り方・スケールも異なります。そのバランスについて丁寧な議論が必要と考えています。

以上